慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	企業金融と企業成長に関する一考察
Sub Title	
Author	早川文子 矢作恒雄
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1988
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1988年度経営学 第637号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001988-0637

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 0637

学生氏名　早川文子　主査　矢作恒雄
副査　和田充夫
所属ゼミナール　矢作恒雄研　青井倫一

企業金融と企業成長に関する一考察

高度成長期における企業財務の主たる仕事は、設備投資のための長期資金の調達に力を尽くすことであった。そして一時的に生じる余裕資金の運用については、メインバンクを中心とした銀行との関係を維持させるための預金に当てられ、運用利回りは二次的な役割を果たしていたに過ぎない。もちろんこの背景として日本では金融の規制事項が多いために運用に関して選択肢が限られていたことも原因の一つといえよう。ところが減速経済下における実物投資の収益率低下、金融の自由化、国際化等を契機として余裕資金運用が活発に行われるようになってきた。そこで当論文は、余資運用による効率が企業間でどのような差を生み出しているのか、またこのことが企業の継続的成長とどの様に関係しているのかを探索することを目的としている。

研究は、総資産を金融資産と本業資産に分け、両投資効率と成長指標との関係を事例３５社を用いて分析し、余資運用と企業成長に関する仮説構築を行った。次に本業資産と金融資産からの経営成果を説明変数に、売上高、営業利益、総資産伸率を企業成長の指標として被説明変数にとり重回帰モデルを設定し、仮説の検証を行った。

定量分析の結果は、①企業の余資運用の効率は自社努力やリスクに対する政策で増減させることができ、それは本業成長と同時に効率を上げることも可能であるが、②利益に占める金融収益の割合を高めすぎると本業での成長の機会を見逃す可能性があることを示唆している。また事例研究より、余資運用を行う場合の成功の要因は、財テクをするしないと言うことではなく、運用の目的を明確にし、事業戦略との整合性を常に考慮にいれた柔軟な政策を採ることであると分析された。